

持続的地域活性化に向けた 「地域おこし協力隊」の分析

京都産業大学 経営学部 井村ゼミナール

鎌田 千聖

庄田 いずみ

坂本 絢音

目次

1 研究動機

6 研究結果

2 地域おこし協力隊とは

(1)移住前の地域別

3 先行研究

(2)前職別

4 現状・背景

(3)年齢別

5 研究方法

7 まとめ・考察

研究動機

内閣府の調査によると、首都圏に住む20代のうち、**新型コロナの影響で地方移住への関心が高まった**と回答した人は26%と、U・Jターンへの機運が高まっている。

私たちは、コロナ以前に地域おこし協力隊に参加した人たちが「**何を思って応募したのか**」、「**なぜ協力隊に参加したのか**」について疑問を持った。

地域おこし協力隊とは

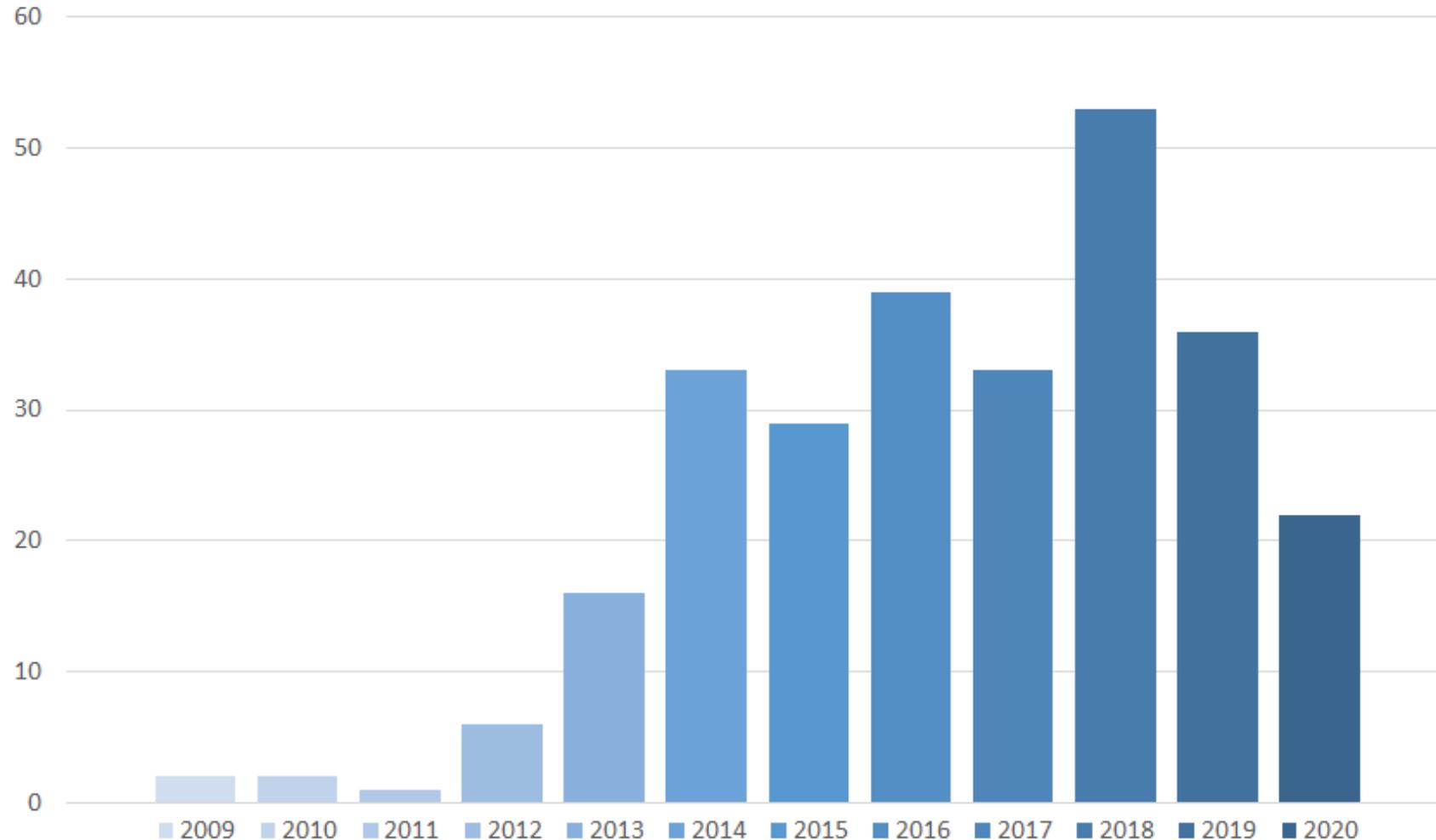
2009年度から総務省がスタートさせた制度

人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、都市部の人材を積極的に受け入れ、**地域の問題解決や活性化のための活動**を行ってもらうことで、地域力の維持・強化、及びその地域への定住・定着を図る取組

地域おこし協力隊に関する論文数の推移

: Ciniiより抽出

論文数の推移



先行研究

平井・曾我(2020)による先行研究では、地域おこし協力隊が曲がり角に来ているとして、現役の協力隊隊員やOB・OGにインタビュー調査等を行い、問題点を明らかにしている。

①隊員数の停滞

- ・ 募集条件にあまり魅力がなく、**隊員を募集しても応募が集まらない**。応募があったとしても**各種のハードルを高く設定し適格者がいない**。あるいは活動地で何らかの問題があり、**隊員の定着が覚束ない**など。
- ・ そのような事態に陥らないよう、地域サポート人ネットワーク全国協議会では、公募に向けた各種のチェックリストを設けているが、自治体内部でもさまざまなステークホルダーがそれぞれの意見や解釈を持つのが通常であり、チェックリスト項目を完全に一致させ共有を図るのは至難の業。

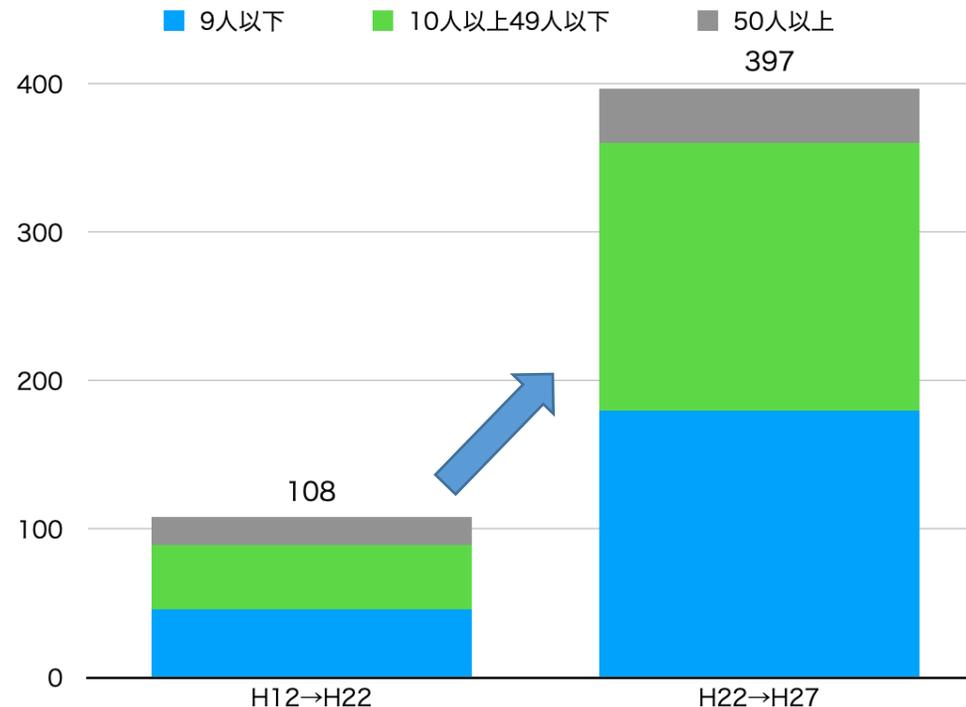
②負担の増加等

- ・ 採用した隊員のスキルについてあまり期待できない場合には、**企業と同様に「ヒトをトレーニングする」という課題がある**。

過疎地域への移住者の増減

近年、若い世代を中心に都市部から過疎地域等の農山漁村へ移住しようとする「**田園回帰**」の潮流が高まっている

平成12年～平成22年の都市部からの移住者が増加している区域に対し、平成22年～平成27年を比較すると、都市部からの移住者が増加している区域数が多くなっている

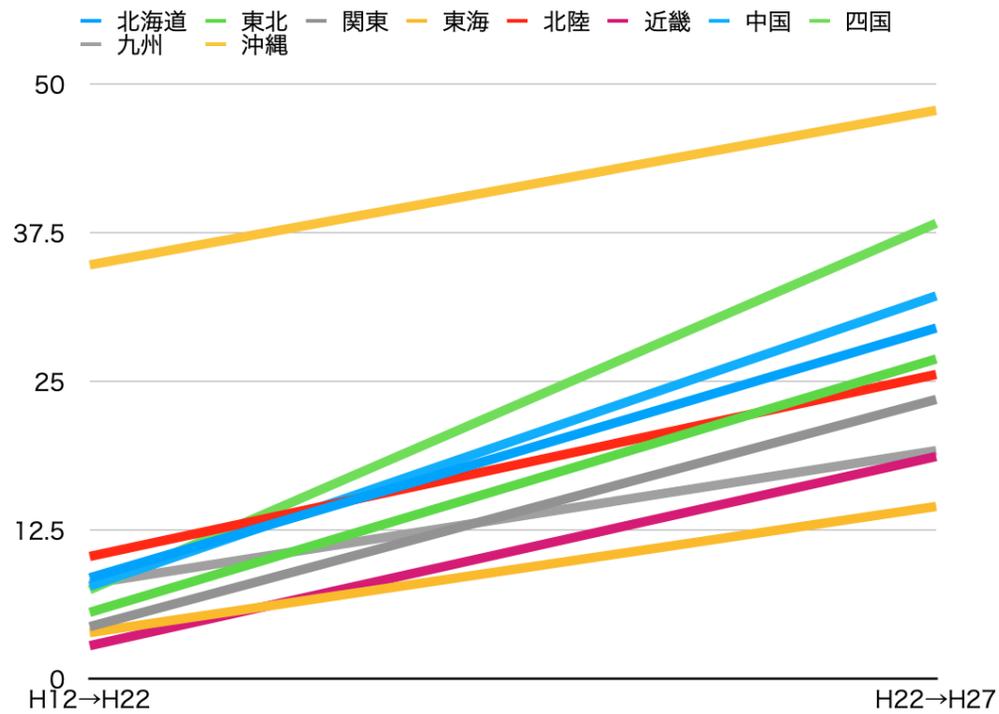


都市部からの移住者が増加している

平成12年、22年、27年国勢調査より

地域別の比較

地域ブロック別にみると、中国、四国及び沖縄ブロックにおいて、移住者増の区域の割合が大きく増加しており、全体の30%を超える区域で都市部からの移住者数が増加している

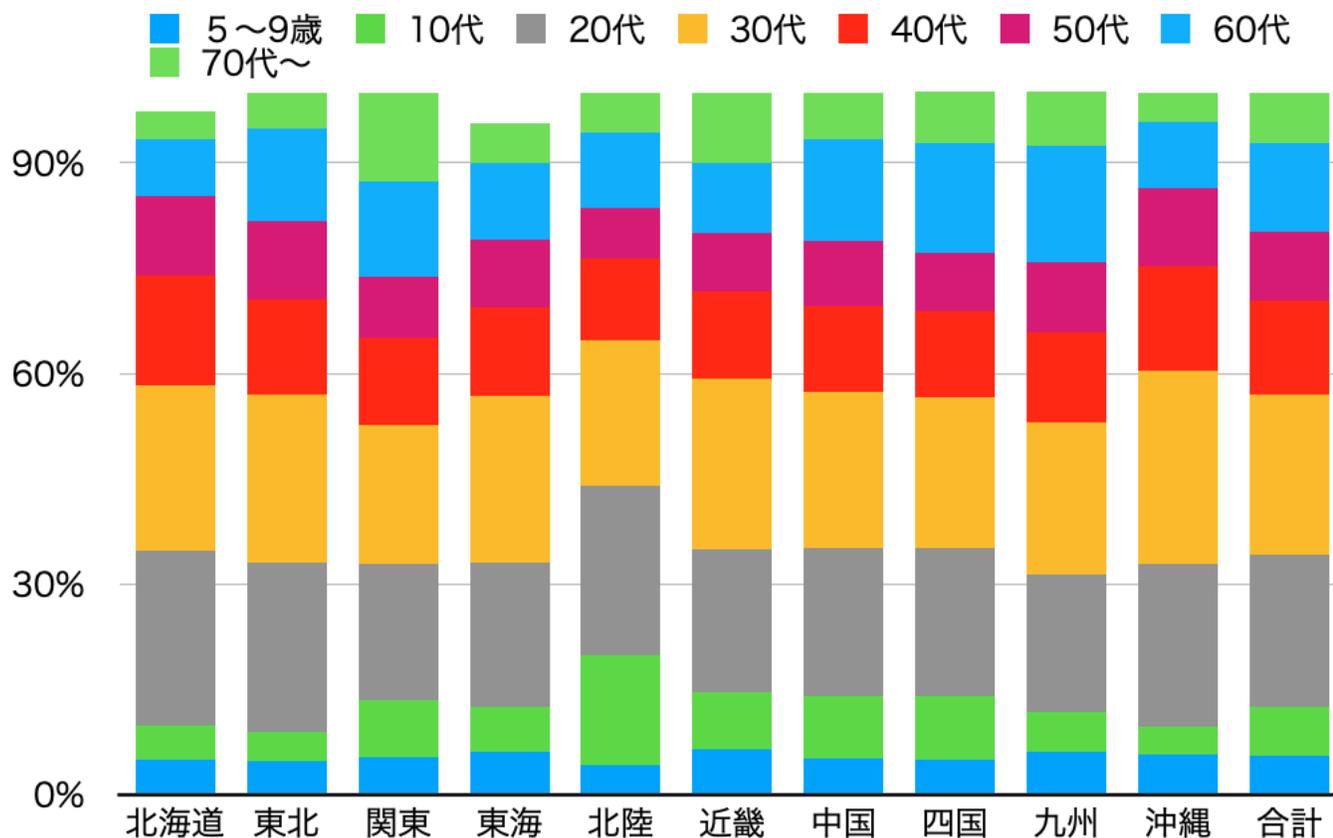


都市部からの移住者が増加している区域の割合
(ブロック別・%)

	H12→H22	H22→H27
北海道	8.5	29.5
東北	5.6	26.9
関東	4.4	23.5
東海	3.9	14.5
北陸	10.3	25.6
近畿	2.8	18.7
中国	7.8	32.2
四国	7.5	38.3
九州	8.0	19.2
沖縄	34.8	47.8

年齢別の比較

都市部から過疎地域への移住者を年齢別にみると、**20代・30代**の若年層が約45%と大きな割合を占めている



移住者の年齢別内訳（地域ブロック別・H27国勢調査）

私たちの研究関心

「なぜ、地域おこし協力隊に参加するのか？」

研究方法

データの概要

地方移住に関する情報を発信しているサイトから、地域おこし協力隊100人分のインタビューを集め、解析した。

<隊員インタビュー内容>

- ・名前
- ・年齢
- ・出身地
- ・前職
- ・移住先
- ・移住前に住んでいた場所
- ・きっかけ
- ・活動内容・感想
- ・目標
- ・参加を考えている方へアドバイス

研究方法

研究手順

- ①地域おこし協力隊サイトの全隊員インタビューをExcelでデータ化
- ②Text Mining Studioを用いて「きっかけ」の項目をテキストマイニング
- ③地域、前職、年齢の3つの属性に分け、単語頻度解析と特徴語抽出を用いて分析

絞込方法

- ・単語頻度解析：品詞は名詞のみ、文字数3文字以上7文字以下
- ・特徴語分析：品詞は名詞のみ、最大分割数30、20単語抽出

< 単語頻度解析 >

単語の頻度に関する情報を表示する

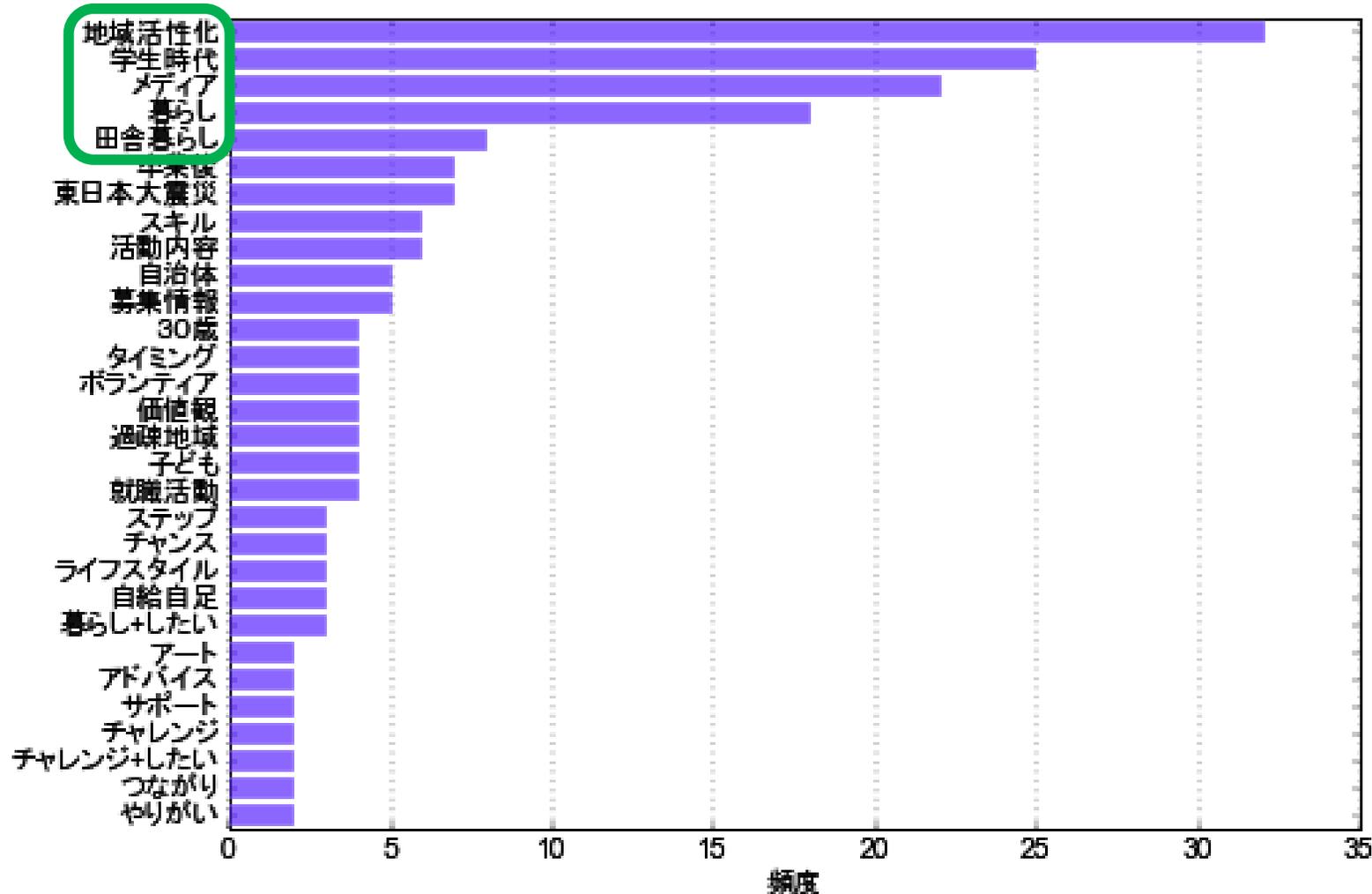
様々なグラフでの表現により、多くの情報を得ることができる

< 特徴語抽出 >

属性毎に特徴的な単語を抽出する

ターゲットを絞った要求の抽出や属性別の傾向などが把握できる

分析結果 単語頻度解析



使用頻度の高い単語は

「地域活性化」

「学生時代」

「メディア」

「暮らし」

「田舎暮らし」

の順に多かった

地域との差について

出身地と移住先を比較する

	出身地	移住先
地域との差 1	茨城県北茨城県	茨城県笠間市
	東京都	千葉県館山市
地域との差 2	大阪府	三重県熊野市育生町
地域との差 3	埼玉県	大分県竹田町

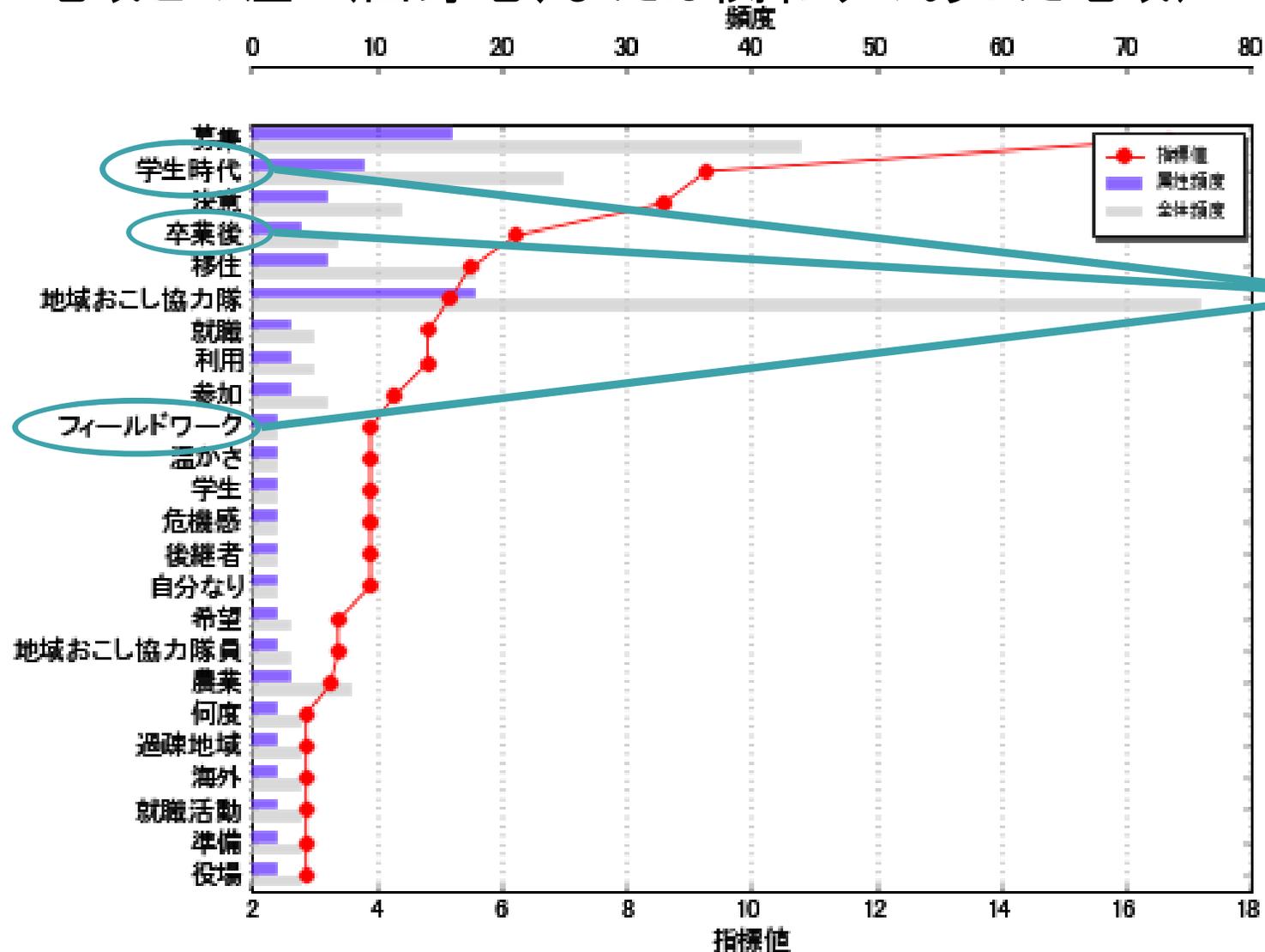
この人は前職が
千葉大学大学院助教



- ・出身地と同じ都道府県、または出身地とは違うが、仕事や旅行で行ったことのある都道府県に移住→**地域との差 1**
- ・出身地と移住先が同じ地方の場合→**地域との差 2**
- ・出身地と移住先に関わりがない場合→**地域との差 3**

分析結果 特徴語分析

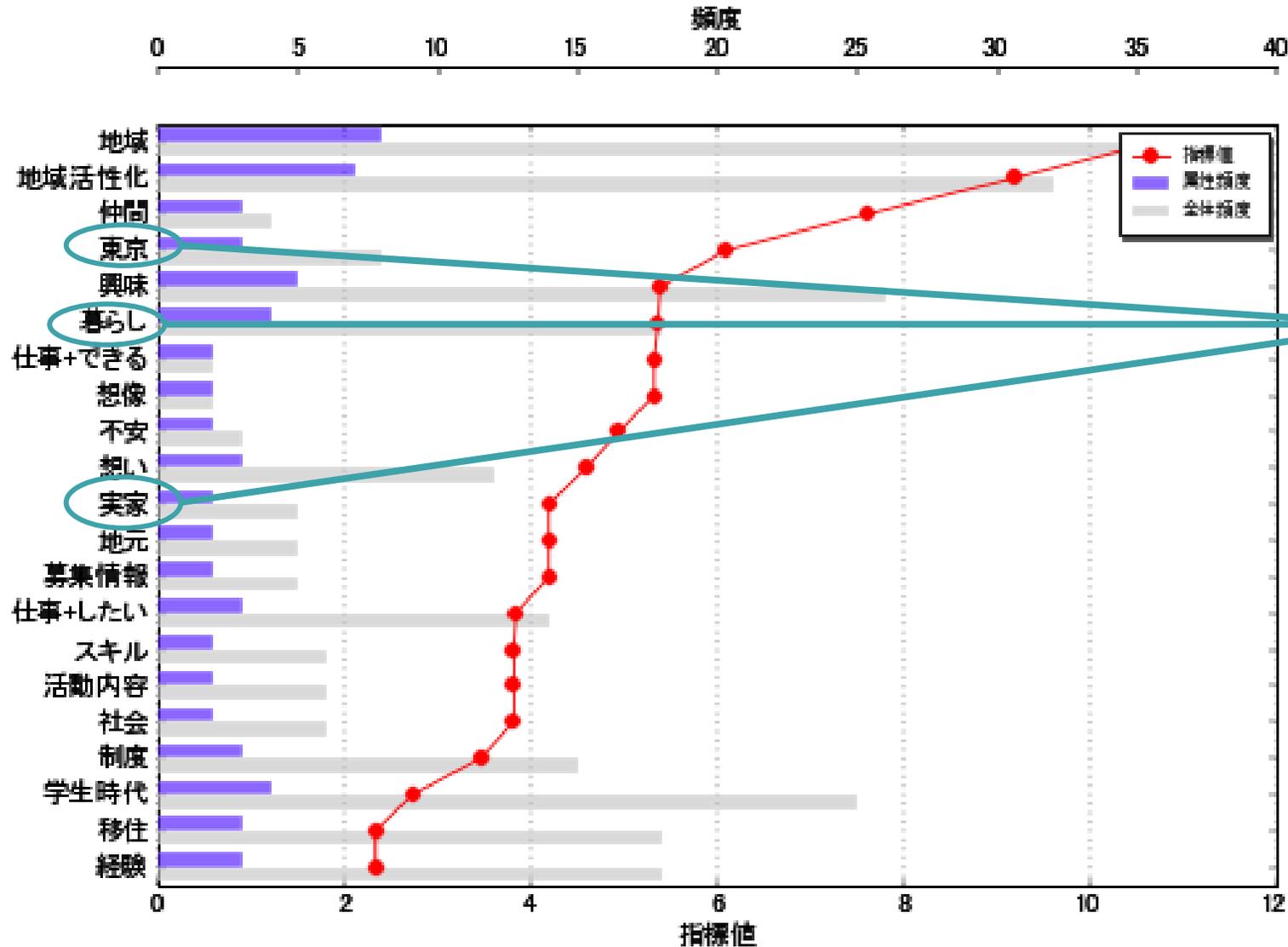
地域との差1 (出身地、または関わりのあった地域)



「学生時代」
「卒業後」
「フィールドワーク」

分析結果 特徴語分析

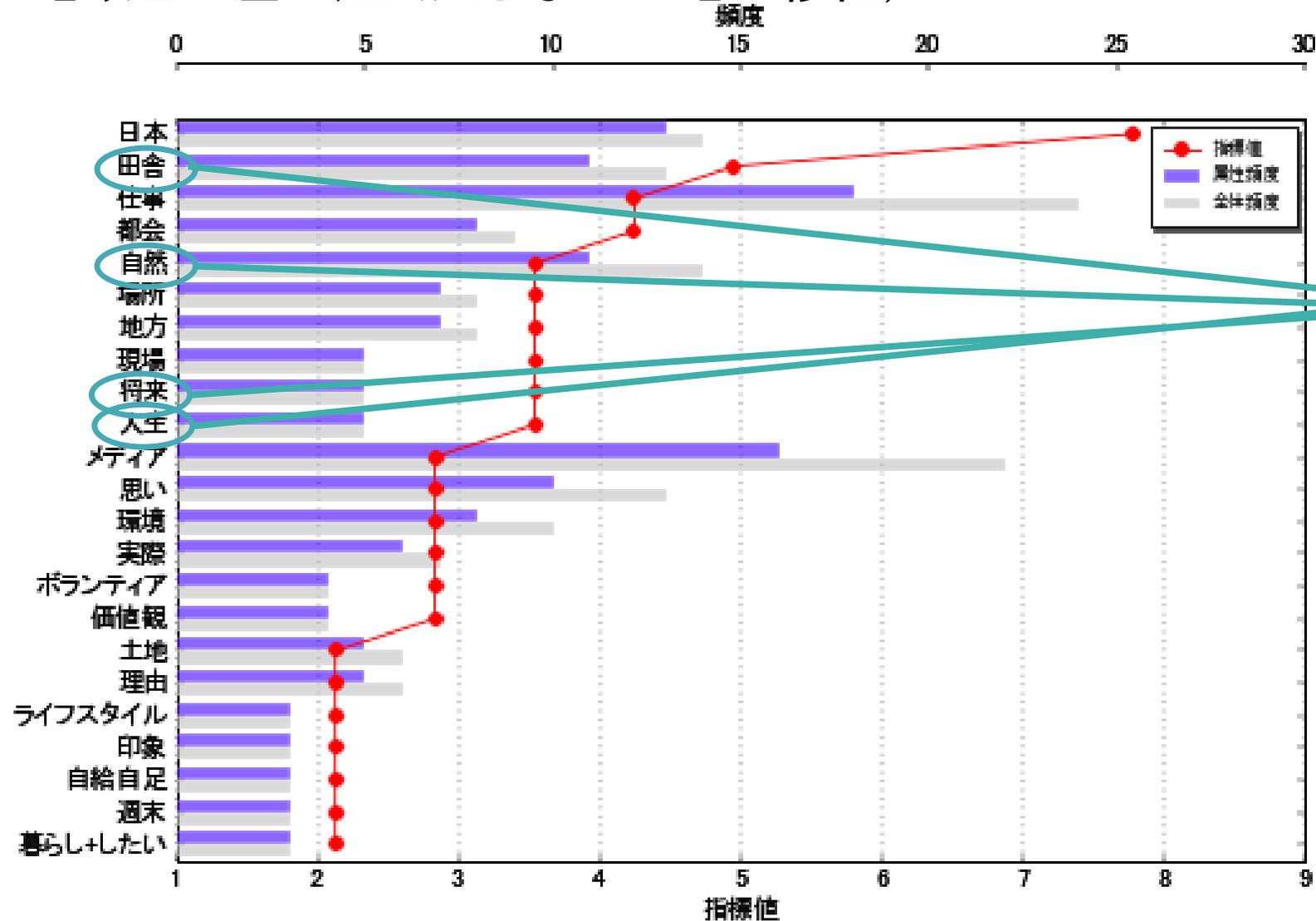
地域との差2 (出身地と同じ地方)



「東京」
「暮らし」
「実家」

分析結果 特徴語分析

地域との差3 (全く知らない土地に移住)



「田舎」
「自然」
「将来」
「人生」

地域との差 考察

- 1 学生時代に学んだことを活かし参加する人が多い
おもに学生時代に地域に関わった経験が、その後の進路に大きく影響している
- 2 上京したが、地元や仲間を求めて移住した人が多い
- 3 都会から田舎へ、人生や仕事のことを考えて移り住んできた人が多い
自分のやりたいことを自由にやりたいという気持ちは強い

前職との差について

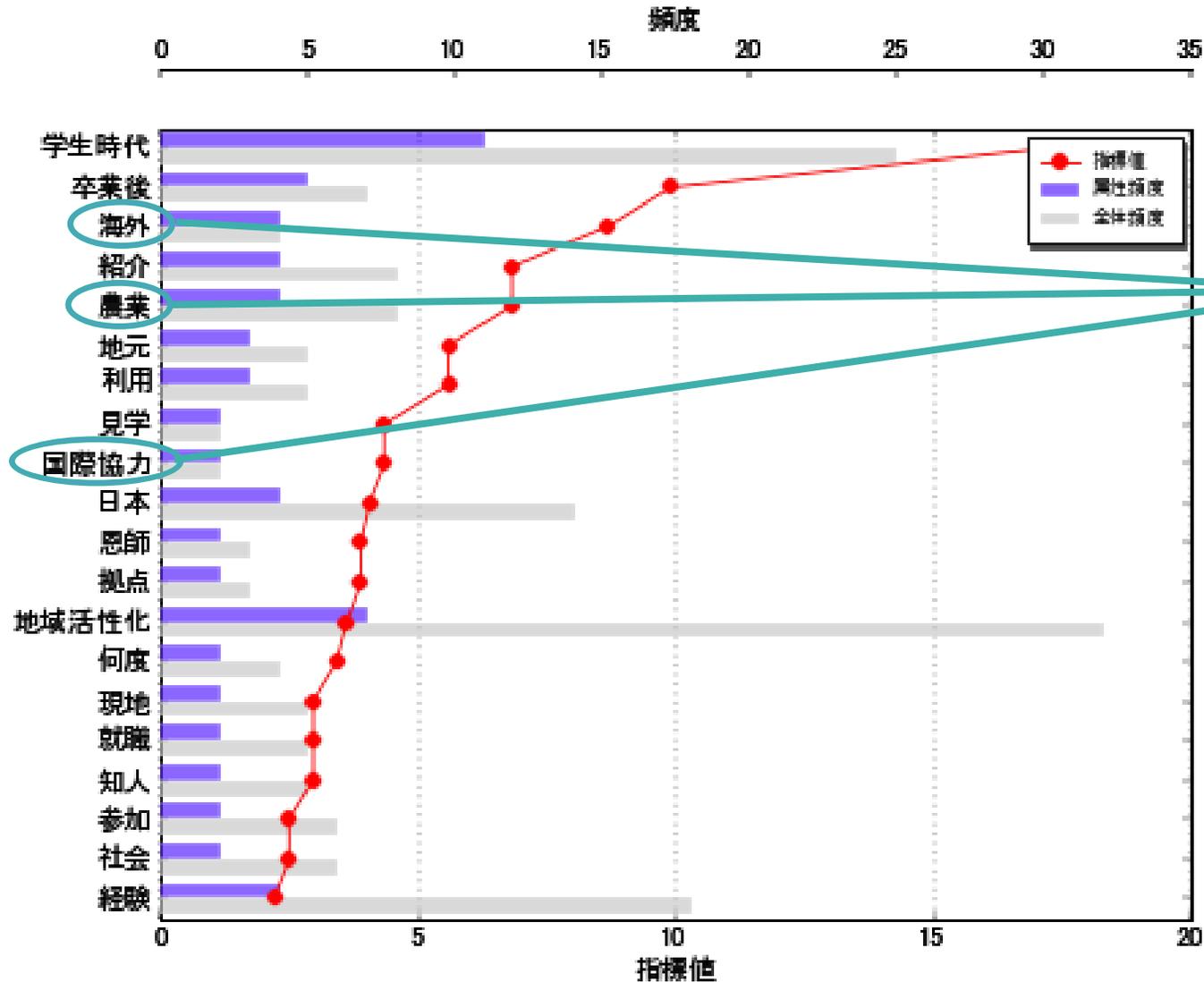
前職と活動内容を比較する

	前職	活動内容
前職との差1	大学院生	NPO法人の内部で交流会や地域説明会など、行政ができない方向からサポートをしている
前職との差2	全日空 (CA)	CAのキャリアを生かし、地域ブランドの商品を空港のラウンジにおいてもらえないかと営業活動をしている
前職との差3	電気部品製造生産管理	地域の方の農作業のお手伝い、行事やイベントなどへの参加などをしている

- ・地域活性化や農業に関わる仕事、勉強をしていた人→前職との差1
- ・前職の経験を生かした活動をしている場合→前職との差2
- ・前職と全く関わりのない活動をしている場合→前職との差3

分析結果 特徴語分析

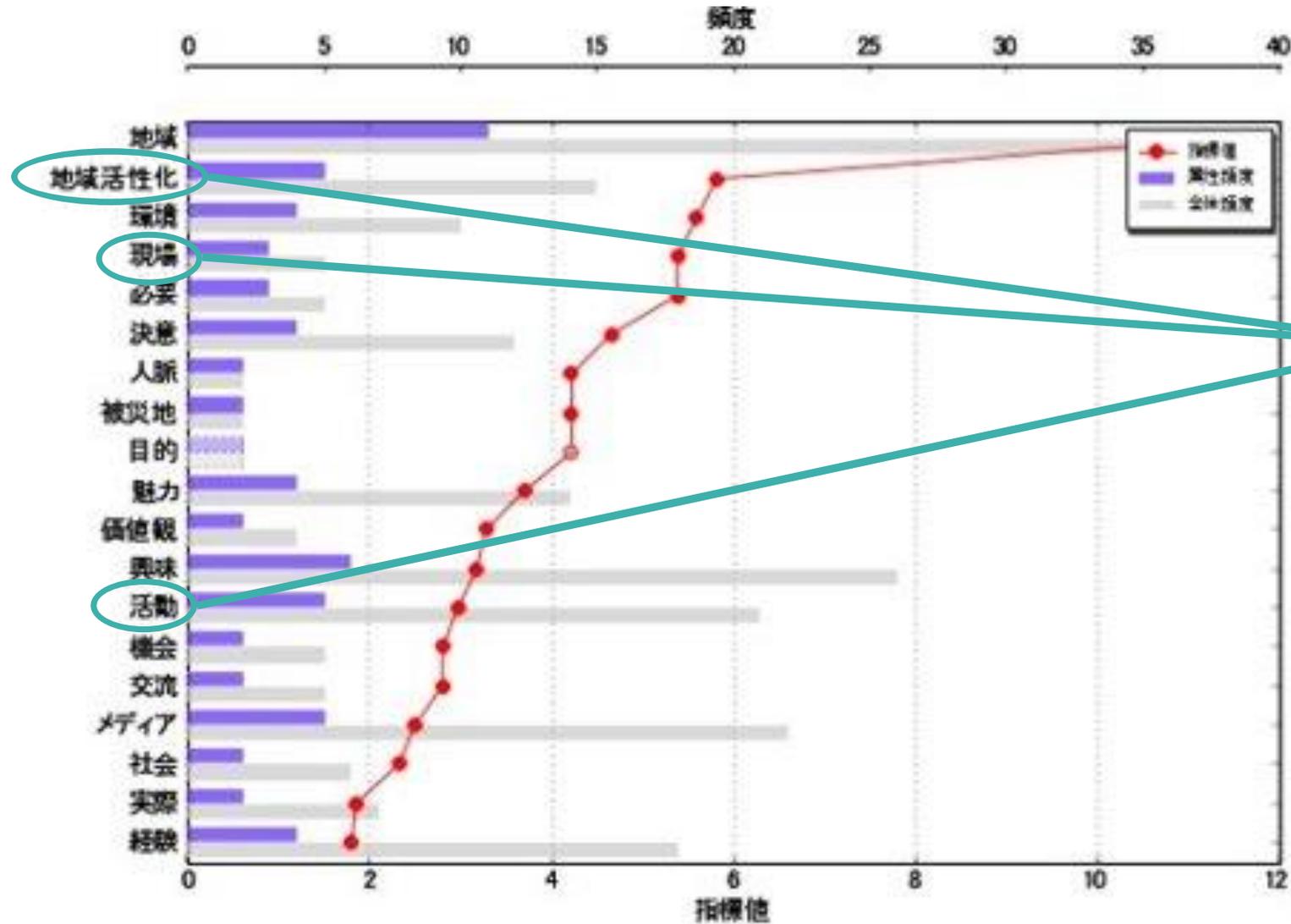
前職との差1 (学生または地域活性や農業に関わる仕事)



「海外」
「農業」
「国際協力」

分析結果 特徴語分析

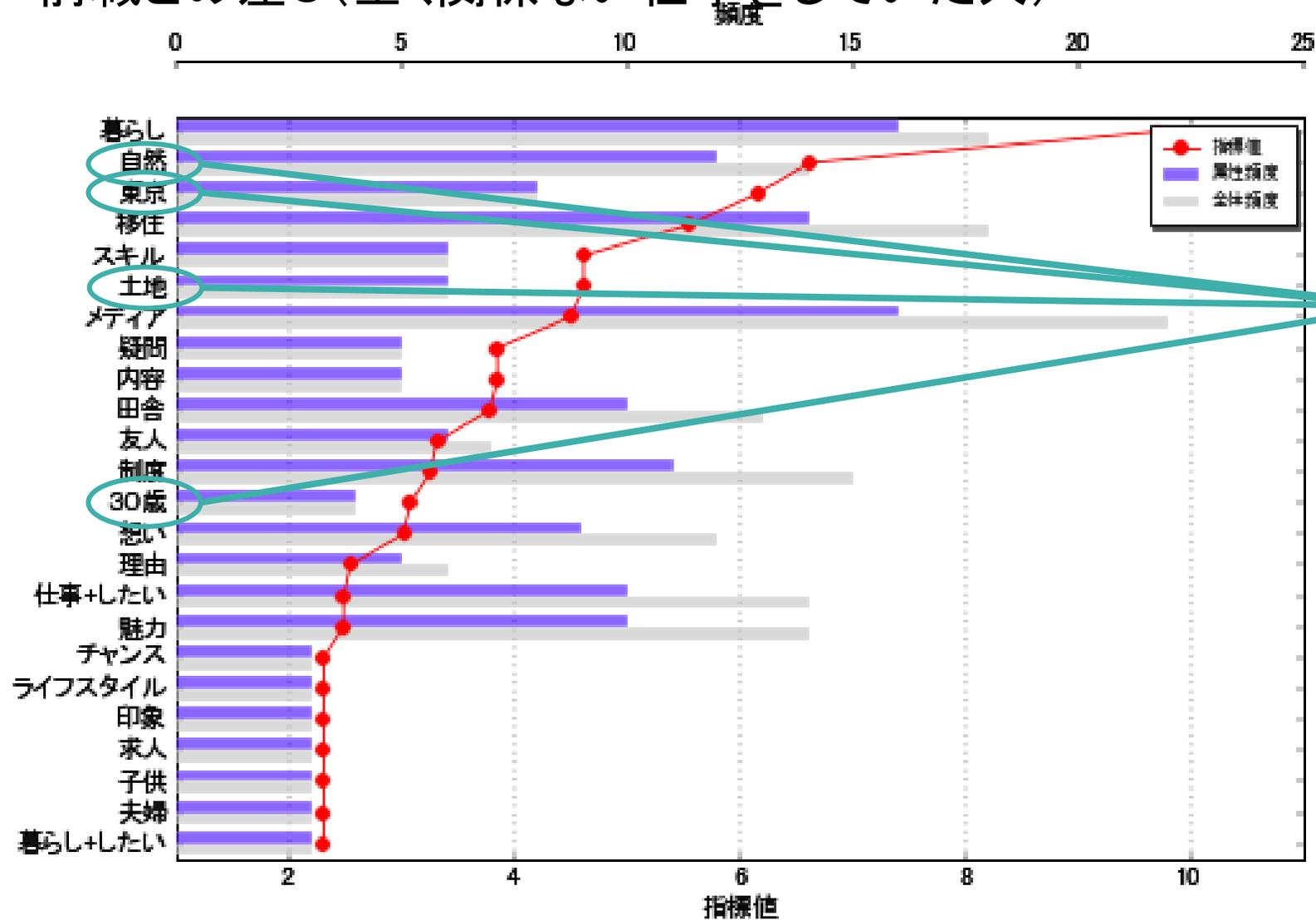
前職との差2 (前職の経験を生かして活動している人)



「地域活性化」
「現場」
「活動」

分析結果 特徴語分析

前職との差3(全く関係ない仕事をしてきた人)



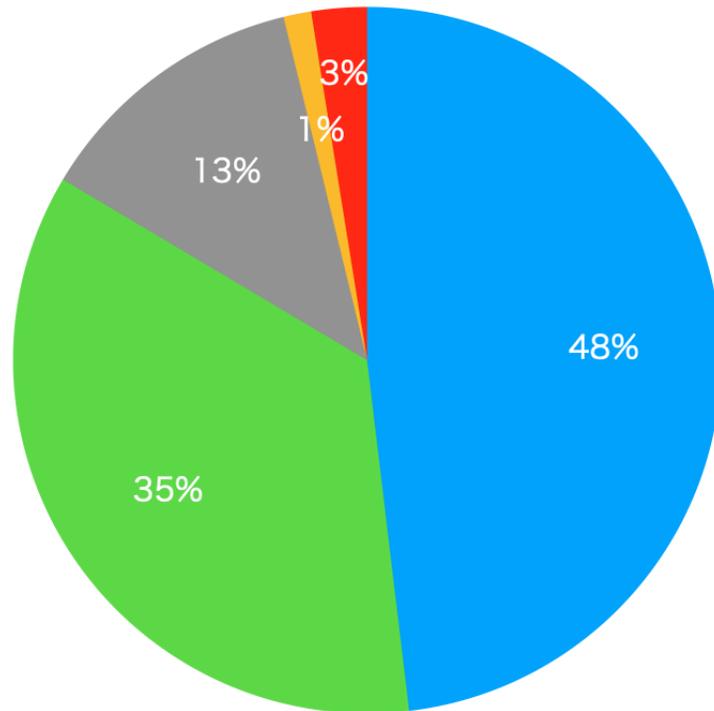
「自然」
「東京」
「土地」
「30歳」

前職との差 考察

- 1 学生や国際協力に携わっていた人が多い
今までやっていた活動の延長線上に協力隊がある
- 2 地域活性化を目的として活動している人が多い
この土地を変えたいという強い思いがある
- 3 東京(都会)での暮らしに疑問を感じ、自然の多い田舎の土地で暮らしたいという思いがあった

年齢の差について

● 20代 ● 30代 ● 40代 ● 50代 ● 60代



サイト内の地域おこし協力隊の年齢の割合

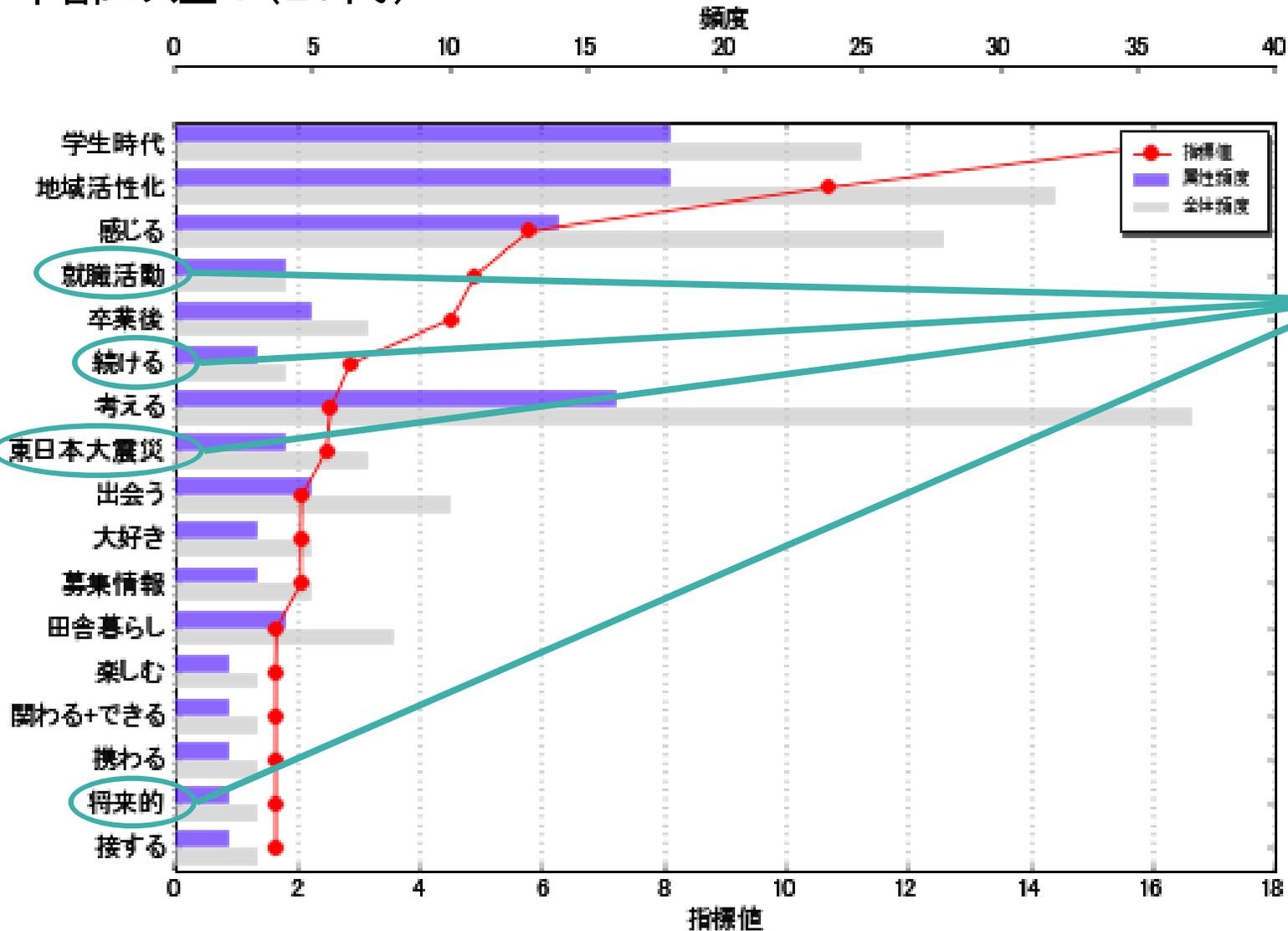
インタビュー当時の年齢が

- ・20代 → 年齢との差1
- ・30代 → 年齢との差2
- ・40～60代 → 年齢との差3

最高齢は64歳だった

分析結果 特徴語分析

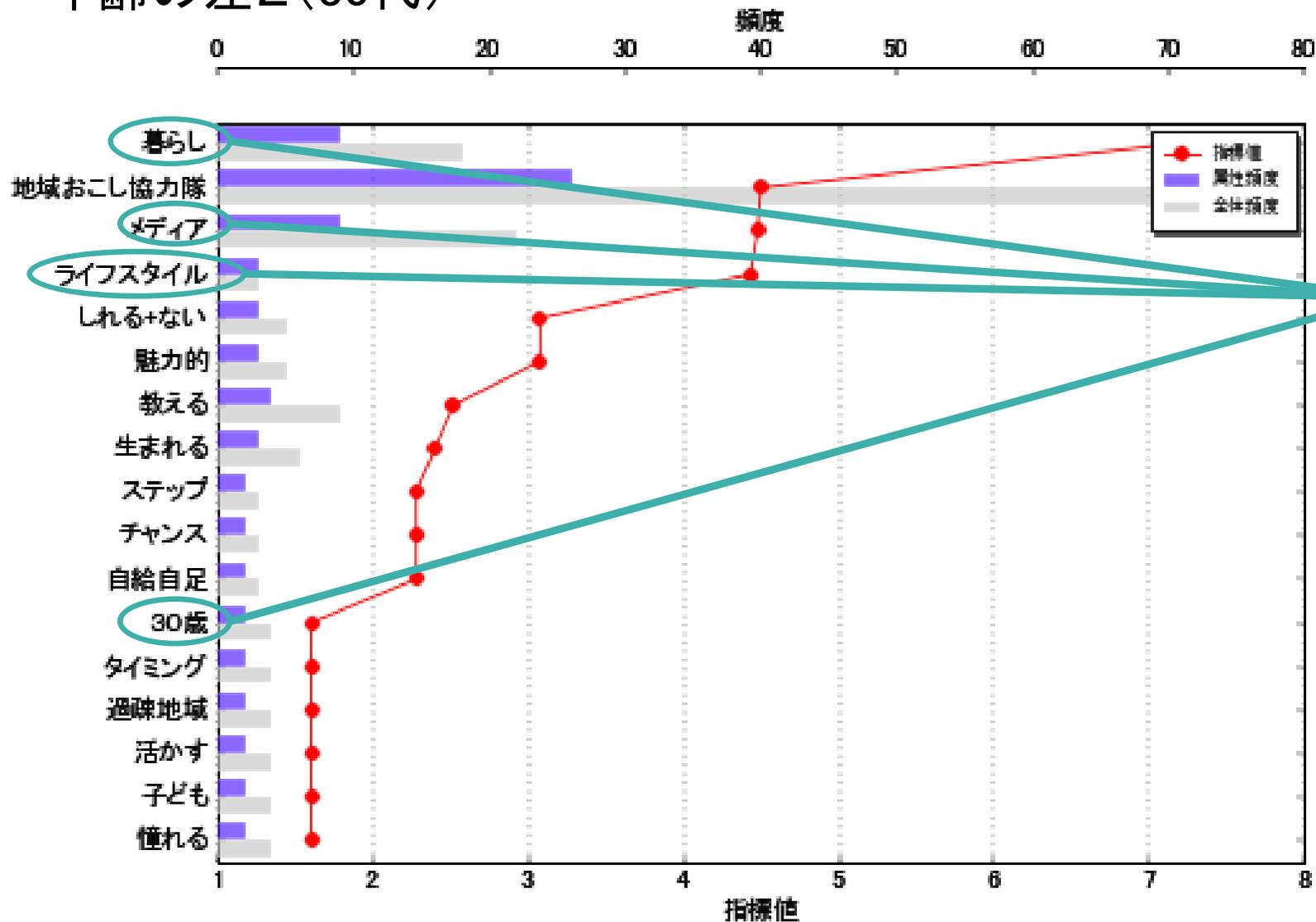
年齢の差1 (20代)



「就職活動」
「続ける」
「東日本大震災」
「将来的」

分析結果 特徴語分析

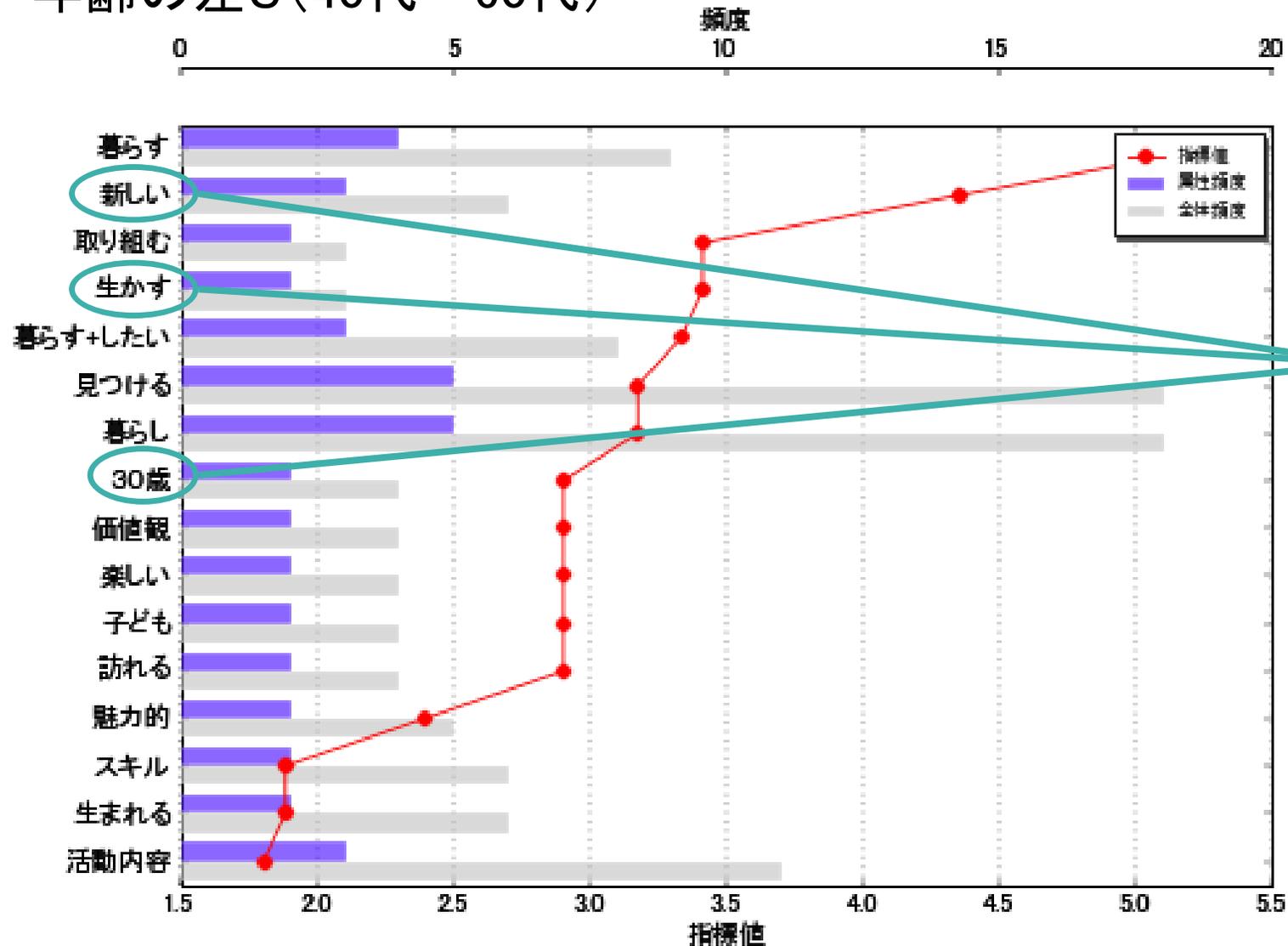
年齢の差2(30代)



「暮らし」
「メディア」
「ライフスタイル」
「30歳」

分析結果 特徴語分析

年齢の差3(40代~60代)



「新しい」
「生かす」
「30歳」

年齢の差 考察

- 1 学生時代に学んだことや問題意識が**きっかけに直結**している
就職活動というワードも出ていることから、就活にも役立っている
- 2 メディアから情報を得る人多数
田舎暮らしに対する魅力やチャンスについて考える機会となる
30歳が人生の節目
- 3 これまでのキャリアを活かして、**新しいことに取り組みたい**と
思い始める

まとめ

◎地域との差、前職との差、年齢の差1・2・3を比較すると、別の条件で比較したにもかかわらず**共通点がある**

- 1 学生時代に地域活性や農業について学び、その活動の流れで地域おこし協力隊に参加。知っている地域に移住することが多い。
- 2 前職のスキルや知識を活かして、地域のために役に立ちたいという思いで地域おこし協力隊に応募。自分が魅力を感じている土地に移住している人が多い。
- 3 都会で生活していたが、仕事や家庭が一段落し、30歳になって人生や新しいライフスタイルについて考えた結果、自然の多い田舎に憧れて移住した人が多い。

考察

- 学生から参加するだけでなくいろんな層が参加している
 - ⇒いろんな層に参加させるべき
 - ⇒ライフスタイルの転換を考え始める30代層にアピールすると 良い
- 学生時代に地域活性化等に参加した人と、ライフスタイルの転換を考えて参加した人のニーズは違う。
 - ⇒学生時代に地域活性化等に参加した人にアピールすると、より堅実で、地元活性化のために働く意欲が強い

参考文献

- 一般社団法人 移住・交流推進機構(JOIN) 地域おこし協力隊隊員インタビュー(8月23日時点)
<https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/report/>
- 「田園回帰」に関する調査研究報告書 総務省(2018)
https://www.soumu.go.jp/main_content/000538263.pdf
- 「新型コロナウイルス感染症の影響下における 生活意識・行動の変化に関する調査」 内閣府(2021) <https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryo2.pdf>
- 曲がり角にきた地域おこし協力隊制度 : ポストコロナをにらみ 平井太郎・曾我亨(2020)
https://hirosaki.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=6093&file_id=20&file_no=1